メタ表象現象からみた証拠性（evidentiality）

内　田　聖　二*

Evidentiality and Metarepresentation

Seiji UCHIDA

要　旨

言語類型論でいう証拠性（evidentiality）という文法的カテゴリーをメタ表象（metarepresentation）の視点から、英語、日本語の具体例をあげて再検討する。証拠性は情報源を明示することと密接にかかわるが、その言語上の具現化は言語によって異なる。証拠性を具現する例としてよく取り上げられるマイナー言語とは異なり、英語や日本語では証拠性を特徴的に表す形態素ないし小辞（particle）は一般にないとされているが、とりわけ日本語の感覚・感情表現や願望表現には情報源と当該人物の関係が証拠性と密接にかかわることを論じる。また、情報源を明示する表現である、英語の‘according to NP’、日本語の「NP によると…という（ことだ）」を取り上げ、その用法の語用論的な変容に言及する。

キーワード：証拠性、高次表意、メタ表象、内在化、外在化

I　証拠性（evidentiality）とは

証拠性（evidentiality）は、Aikhenvald（2004）や de Haan（2012）をはじめ、いろいろな定義の仕方があるが、「情報の源や陳述を述べる根拠を言語的にマークする文法現象」とまとめることができる。この文法現象の証左はおもにマイナー言語の分析から得られた成果に基づいていることが多い。典型的な例として、Aikhenvald（2004：2-3）から南米北西部の Tariana 語の例を引用してみる。(1) の ka は José がサッカーをしているところを実際に目にしたときに用いられるもので、その情報が視覚から得られたものであることを示している。

(1) Juse ifida di-manika-**ka**
‘José has played football（we saw it）’

また、(2) の文尾にみられる mahka は、歓声が聞こえることからサッカーの試合が行われている

2021 年 10 月 4 日受理　*特命教授

と判断したことを示唆している。

（2）Juse iſida di-manika-**mahka**
‘José has played football（we heard it）’

さらに、(3）の nihka は、たとえば、サッカーボールがいつものところに見当たらず、かつサッカーシューズもないことから、José がサッカーをしているのではないかという推論をしていることを伝えている。

（3）Juse iſida di-manika-**nihka**
‘José has played football（we infer it from visual evidence）’

（4）における sika の使用は、話し手が José は日曜日の午後いつもサッカーをしているということを事前に知っていることを暗示する。

（4）Juse iſida di-manika-**sika**
‘José has played football（we assume this on the basis of what we already know）’

次の pidaka は‘José has played football’という情報を他から得た場合を表している。

（5）Juse iſida di-manika-**pidaka**
‘José has played football（we were told）’

英語、日本語には（1）から（5）のような文法カテゴリーとしてまとめられる言語事象はないが、いわば文字通りの言語表現はもちろん存在する。列挙するほどでもないが、(6)、(7）がそれぞれの証拠性表現の具体例である。

（6）allegedly, apparently, presumably, reportedly, seemingly, supposedly, as it appears, as I have heard, I am not told that …, I hear that …, I see that … , I understand that …, it is imaginable, it is plausible that …, it is said that …, it seems to me that …, it is thinkable that …, etc.（Lazard 1991, 2001, de Haan 2012, Nuyts 2017）

（7）聞くところによると、見たところ、おそらく、伝えられるところでは、…らしい、聞いている、考えられる、言われている、書かれている、etc.

本稿では、英語および日本語において証拠性にかかわる言語事象を特徴づけることが可能な視点をメタ表象現象に求め、具体的には関連性理論の高次表意を道具立てとして記述することを目標とする。II 節で関連性理論における高次表意とメタ表象現象との接点に触れ、III 節で証拠性という視点から外在化、内在化という概念を導入する。次の IV 節では外在情報と内在情報が混在

する様相を日本語の「がる／がっている」と「たい／たがっている」という言語事象から観察する。V 節は外在情報と内在情報の境界について英語の ‘According to NP’、日本語の「NP によると…ということだ」を具体例としてとりあげ、意味論／統語論と語用論とのせめぎ合いの現状を観察する。VI 節は結語である。

II　高次表意（higher-level explicature）とメタ表象（metarepresentation）

Grice（1989）は「いわれていること（what is said）」と「いわれていないこと（what is not said）」を区別し、後者を「推意」としたが、この区別はそれほど単純なものではなく、それぞれが互いに相補的な関係にはない。たとえば、実際に「いわれていること」を正確に理解しようとすると、そこにも「いわれていないこと」を取り入れなければ話し手の意図を正確にとらえることはできない。すなわち、明示的に伝達されていることは「いわれていること」よりもはるかに豊かなのである。たとえば、次のような発話をみてみよう。

（8）a. I finally visited Loch Ness in Scotland and met an old friend of mine!
　　b. You seem to have a fever. Go see the doctor.
　　c. She walked back into the room carrying two drinks and handed it to him.

これらの発話は述べられている字面だけの解釈では話し手の真意を正しく把握することはできない。（8a）の後半部、旧友に会ったのは、もちろんネス湖であって、ほかの場所ではない。つまり、‘met an old friend of mine *there*’ と there を補う必要がある。また、（8b）の a fever は単なる「熱」ではなく「医者に行くべきほどの高熱」であることを示唆している。さらに、（8c）にみられる it には文法的に指すべき対象がないが、ここでは「持ってきた二つの飲み物のうちの一方」を指示しているのは明らかである。これらの「いわれていないこと」を無視して発話の意図を理解することはできない。

この豊かな「いわれていること」を Sperber and Wilson（1995）は「表意（explicature）」と呼んだ。表意は、Carston（2002）に従うと、最終的に、disambiguation, saturation, free enrichment, ad hoc 概念形成から得られる。さらに、Wilson and Sperber（1993）は高次表意（higher-level explicature）という概念を導入し、それまでの表意を基礎表意として区別した。その高次表意には、基礎表意の上位に、発話行為と話し手の命題態度を反映する節（clause）を設けた。たとえば、(9) の発話の基礎表意は（10）、そしてその高次表意は（11）に挙げたものがその候補となりうる。

（9）太郎が次郎に：ゴキブリだ。
（10）There’s a cockroach（at a certain place at a certain time）.
（11）a. Taro says to Jiro that there’s a cockroach.（発話行為）
　　b. Taro warns Jiro that there’s a cockroach.（発話行為）
　　c. Taro is surprised to find that there’s a cockroach.（命題態度）

d. Taro is delighted to find that there's a cockroach.（命題態度）

発話（9）は音調、ストレスなどのプロソディックな情報を援用することによって様々な用途に用いられる。（11a）、（11b）は発話行為を、（11c）、（11d）は命題態度を表しているが、（11b）は、たとえば、「ゴキブリがいるから気をつけよ」という警告を発している。他方、（11c）は清潔なキッチンで、それまで目にすることのなかったゴキブリを見つけたときの驚きを表明していることが可能性の一つとして考えられる。また、（11d）は、実験用に一匹足りない状況でようやく見つけたうれしさを表す発話と考えうる[1)]。

この高次表意として記述される言語事象と密接にかかわりあうのがメタ表象現象である。「心に思い描くこと」を'representation'と言うと、metarepresentation（メタ表象）とは、字義通りには「心に思い描くことをさらに思い描くこと」となり、「低次の representation が埋め込まれた高次の representation」（Wilson 2000）と言うことができる。つまり、誰かが思っていること、あるいは言ったことを他の人が思い描く作業をいう（内田 2011a, cf. 内田 2005b）。

Sperber（ed.）（2000:3）では、心に思っていることや実際にことばで表現されたことを思い描いて、第三者に伝える言語現象をもその範囲に含め、心に思い描くことを mental representation（心的表象）、実際に発話することを public representation（発話表象）として、ことばにかかわるメタ表象を次の 4 つに分類している。

（12）a. 心的表象の心的表象（mental representation of mental representation）
b. 発話表象の心的表象（mental representation of public representation）
c. 心的表象の発話表象（public representation of mental representation）
d. 発話表象の発話表象（public representation of public representation）

たとえば、（13a）はジョンが'it will be fine tomorrow'と思っているということを聞き手が心に描くメタ表象の例であり、（13d）は'it will rain'とジョンが言ったことを実際に口にするというメタ表象を表している。

（13）a. the thought'John believes that it will be fine tomorrow'
b. the thought'John said that it will be fine tomorrow'
c. the utterance'John believes that it will be fine tomorrow'
d. the utterance'John said that it will be fine tomorrow'

このメタ表象は高次表意と表裏の関係にあり、メタ表象のプロセスを具現したものが高次表意と言い換えることができよう。異なる観点から言うと、聞き手はそのメタ表象能力を駆使して基礎表意、高次表意を構築していくと考えられるのである。このようにとらえ直すことによって高次表意を仮定することの裏づけが得られるのである。たとえば、（14）は（13d）でいう「発話表象の発話表象」の具体例で、そのメタ表象のプロセスは（15）のように表示できる（内田

2011b:149-150）。

（14）次郎が三郎に：太郎は（私に）コギブリ！と言った。
（15）[Jiro said [Taro said to Jiro [There was a cockroach]]（cf.（13d））

III　外在化（externalization）／内在化（internalization）と証拠性

私たちは思っていること、考えていること、伝えたいことをどのように言語化しているのであろうか。一般に、私たちの頭のなかにはたくさんの既存情報がいわば知識として蓄えられている。その既存情報は、もともとはほかの情報源や自らの経験から得た情報が蓄積されたものと考えることができよう。つまり、私たちは、いわば基本的な心的能力、言語能力を備えてはいるが、知識の点ではゼロである初期状態の幼児のころから自らの経験、体験をもとにして知識を蓄えていくのである。

その蓄積の過程は、まず接した情報を既知情報と照応することから始まると考えてよい。その情報が既知情報にない、まったく新しいもので、かつ信じるに足る情報源からであれば、そのまま既存知識に付加されるであろう。学校教育のなかで習得される、自然現象、科学的事実、歴史的事実なども同じように処理され、それらは同じ環境を経た他の人と共有している知識、常識とみなされるであろう。また、その新情報が既存知識と相互作用して、さらに新しい結論へとつながっていく場合もあるだろう。

また、新情報に直接、間接に関連する情報がすでに蓄えられている場合は、いくつかのパタンが考えられる。まず、もっている既知情報に比べ、情報源の信頼度や情報内容の説得性などからより信頼のおけるものと判断すれば、その既存情報を上書きすることになろう。その上書きの仕方は、既知情報を破棄して新情報がそれと全面的に置き換わるか、あるいは、部分的に修正しながら一部を並置しておくような場合もあろう。さらに、新情報が自ら保持している情報を否定するほどの根拠がないと判断される場合は、拒否され、既知情報化されることにはならないであろう[2)]。

図 1 に示したような情報の蓄積過程を「内在化（internalization）」と呼び、また、内在化されていない「外」にある情報を「外在情報」と考えよう。

New Information
（internalization）　↓
Knowledge

図 1

ここでは、外部からの情報を内在化するプロセスとしての具体例として、（16）のような言語表現を仮定してみよう。

（16）a. 新型コロナ感染症は武漢が発祥地だとの報道があった。
b. 新型コロナ感染症は武漢が発祥地だと言われている。
c. 新型コロナ感染症は武漢が発祥地らしい／のようだ／にちがいない。
d. 新型コロナ感染症は武漢が発祥地だ。
e. 新型コロナ感染症は武漢が発祥地だから／なのでそこを徹底的に調査すべきだ。

（16a）は新情報として伝える最初のマスコミによる報道を念頭に置いて、それをそのまま事実として述べている。（16b）は情報源を明示しない伝達表現、（16c）はそのような報道を受けての話し手の類推、予想という形をとっている。（16d）はこの情報を、そのほかの状況証拠から真と話し手が判断したことを表している。さらに、（16e）はその情報を一般にも了解されている既知情報化し、前提として従属節内で用いられている。つまり、証拠性という概念を援用して言えば、（16）のプロセスは外部にある情報を明示的に伝える言語事象から、確信の度合いを表すモーダルな要素を経て、自らの責任で事実として断定する段階へ至り、さらにそれを前提理由として新しい主張へと発展して述べる現象を例証しているものである。

次の IV 節では外在情報と内在情報が具現化する様子が観察される言語事象として「がる／がっている」と「たい／たがっている」を取り上げる。

IV　外在／内在の混在化と言語事象

この節では、外部からの情報と内部に存在する情報がどう相互作用して言語表現にかかわっているのかについて、日本語から考察していきたい。

1. 「がる／がっている」

日本語における、暑い、寒いなどの感覚、あるいはさびしい、悲しいなどの感情表現は主語にどのような人称がくるかで述部の形式が規定されることはよく知られている。この現象を Aoki（1986）は証拠性という観点から（17）のように記述し直している。

（17）証拠性にかかわる日本語表現
a. 間接的な証拠をもっている場合 :「彼は暑がっている」
b. 断定する根拠のある場合 :「彼は暑いのだ」cf.「*彼は暑い」
c. 完全な情報を持ち合わせていない伝聞表現 :「彼は暑いようだ／って」

Aoki（1986）は当事者でなければわからない感覚ないし感情とその主語との整合性に触れている。周知のことであるが、（18）、（19）の言語事実は、一人称主語と「暑い／さびしい」が共起し、三人称主語は「暑がっている／さびしがっている」と結びつくことを物語っている。

（18）a.（私は）暑い。

b.（私は）さびしい。

（19）a. *彼は暑い。

b. *彼はさびしい。

c. 彼は暑がっている。

d. 彼はさびしがっている。

Aoki（1986）は日本語の証拠性を表す「がる」、「の」、「よう」はそれぞれ動詞、名詞、形容詞に属し、文法に内在していない（not grammaticized）としているが、（19a, b）や「*私は暑がっている／さびしがっている」は明らかに容認されない文であり何らかの規則に則っている。また、メタ表象現象の典型である伝達動詞の補文として生起すると、次のように、（18）、（19）の文法性が逆になることにはまったく触れていない。

（20）a. 彼は暑い／さびしいと言った。

b. *彼は暑がっている／さびしがっていると言った。

すなわち、（20）では当事者は三人称であるが「暑い／さびしい」が現れ、「暑がっている／さびしがっている」は生起していない。

次節ではその「規則性」を「たい／たがっている」構文を例として、証拠性という観点を交えて観察し、「暑い／さびしい」「暑がっている／さびしがっている」の言語事象も同じ土俵上でとらえることができることを議論する。

2. 「たい／たがっている」

日本語で情報源が含意される現象を「たい／たがっている」という言語表現から観察してみる。以下では、内田の一連の研究の骨子を継承しつつ、新たに証拠性という観点から見直してみる。（cf. 内田 2020）まず、次の基本文からはじめる。

（21）a. 私は花子と結婚したい／*したがっている。

b. 太郎は花子と結婚*したい／したがっている。

（21a）から明らかなように、「たい」表現は一人称主語と共起し、「たがっている」表現とは共起しない。他方、三人称主語は、逆に、「たがっている」表現と共起するが、一人称主語とは共起しないことを（21b）は示している。一般に知られているのは、この「たい」は一人称、「たがっている」は三人称と結びつく、という単純な原則であるが、メタ表象という観点を入れると全体像が一変することはあまり知られていない。この基本文を、メタ表象とのからみから、いわゆる伝達動詞の被伝達部の位置に置いた（22）をみてみよう。

（22）a. 太郎は私が花子と結婚*したい／したがっていると言った。

b. 太郎は花子と結婚したい／*したがっていると言った。

（22a）は、「私」は単純な構文では一人称主語と共起していた「たい」表現とは結びつかず、「たがっている」表現と共起することを表している。また、逆に、（22b）の三人称主語「太郎」は「たい」表現とは共起するが、「たがっている」表現とは結びつかない。つまり、「たい／たがっている」と一人称主語と三人称主語との共起は（21）と（22）とではその文法性が逆転しているのである。

こういった言語現象を願望表現の当事者と情報源がどう明示されているかという視点から見直してみる。まず、上で「たい／たがっている」表現の主語の人称が変わることで文法性も変わることをみたが、これは、願望表現の当該人物と「たい／たがっている」の共起は文法的な人称の問題だけではないということが示唆されているのである[3)]。つまり、伝達動詞の補文となることで（21）と（22）における人称と願望表現の文法性が一変することは、当該人物と情報源に変化があるため、と言い換えることができよう。たとえば、（22a）は願望表現の主体が「私」、「私が花子と結婚したがっている」と言っている人物が「太郎」であること、すなわち、情報源が「太郎」であることを明示している文である。また、（22b）は「花子と結婚したい」のは「太郎」で、その情報源も「太郎」であるので「たい」表現が共起しているのである。つまり、日本語の「たい／たがっている」の異同は情報源が密接に関与しているということになる。この言語事実を当該人物と情報源という視点から（23）のようにまとめてみよう。

（23）a. 私は花子と結婚したい。: 当該人物、情報源ともに「私」
　　b. 太郎は花子と結婚したいと言った。: 当該人物、情報源ともに「太郎」
（24）a. 太郎は花子と結婚したがっている。: 当該人物は「太郎」、情報源は「私」
　　b. 太郎は私が花子と結婚したがっていると言った。: 当該人物は「私」、情報源は「太郎」

これら（23）と（24）のまとめから、その説明原理として（25）を導き出すことができる[4)]。

（25）願望表現の当該人物と情報源が一致している場合に「たい」表現が現れ、一致しないときには「たがっている」表現と共起する[5)]。（cf. 内田 2011:185）

このような観点から「たい／たがっている」の異同をとらえることは、情報源が密接に関与しているという点で証拠性現象と通底するところがあり、かつ、「暑い／寒い」、「さびしい、悲しい」、といった感覚、知覚や内面心理などにかかわる述部にもかかわるものと思われる。「暑い」と「さびしい」を例として、（21）から（24）に対応する言語事実を記述してみよう。（26）と（27）は「暑い／さびしい」と一人称、三人称主語との共起関係である。

（26）a. 私は暑い／*暑がっている。
　　b. 太郎は*暑い／暑がっている。

（27）a. 私はさびしい／*さびしがっている。
b. 太郎は*さびしい／さびしがっている。

上記の発話を太郎が伝達したものが（28）、（29）である。

（28）a. 太郎は私が*暑い／暑がっていると言った。
b. 太郎は私が*さびしい／さびしがっていると言った。
（29）a. 太郎は暑い／*暑がっていると言った。
b. 太郎はさびしい／*さびしがっていると言った。

いずれも（21）と（22）同様の分布をしていることは明らかである。これを（30）、（31）のように集約してみる。

（30）a. 私は暑い／さびしい。: 当該人物、情報源ともに「私」
b. 太郎は暑い／さびしいと言った。: 当該人物、情報源ともに「太郎」
（31）a. 太郎は暑がっている／さびしがっている。: 当該人物は「太郎」、情報源は「私」
b. 太郎は私が暑がっている／さびしがっていると言った。: 当該人物は「私」、情報源は「太郎」

これらの言語事実は「暑い／さびしい」、「暑がっている／さびしがっている」も「たい／たがっている」とまったく同じ振る舞いをするということを物語っている。つまり、「暑い／暑がっている」、「さびしい／さびしがっている」の言語事象も（25）の制約に従っており、証拠性現象と密接な関係があることが明らかになったのである。

V　外在化と内在化の境界

この節では、上で述べた外在情報と内在情報にかかわり、かつその境界に密接にかかわると思われる言語表現として、英語の according to NP とそれに対応する日本語表現について内田（2020）を典拠に考察していく。

1.　According to NP

according to NP という英語表現は、証拠性という観点から言えば、NP が続く発話内容の情報源であることを明示するものであるが、とりわけこの構文に焦点が当てられたのは Ross（1970）の遂行分析においてであった。（32）と（33）は Ross（1970）からの例であるが、ここでそれぞれ me と him が排除されるのは、（34）のような制約が存在するからであるとされた。

（32）According to Indira Gandhi [The Realist ／ Satchel Paige ／ you ／ *me], food prices will skyrocket.

（33）Satchel Paige$_i$ claimed that according to Indira Gandhi [The Realist ／ *him$_i$ ／ you ／ me], food prices will skyrocket.

（34）No well-formed deep structure may contain an embedded *according to*-phrase if the NP in that phrase is identical to any NP belonging to the first sentence above the one containing that phrase.（Ross 1970: 236）

この制約を簡略化して言えば、「according to NP の NP がすぐ上の文の発話元の NP と同一ならば非文となる」[6] ということになる。よって、（32）では明示されていない遂行節 [I SAY TO YOU] に I があるので me とは共起せず、（33）では him がすぐ上の Satchel Paige と同一指示なので非文となっているのである。

この Ross の統語的な説明に対して、内田（2020）は語用論的解釈の妥当性を議論しているが、その過程で、Ross が不可とした‘according to me’がコンピューターコーパスにみられることを報告している。SCN-BNC [7] ではヒットしなかったが、COCA では 32 例観察され（2020 年 2 月 3 日現在）、当該語句が文頭ないし間投詞の後に位置してその後に文が続く例が 11 件みられた。（35）はそのなかの 3 例である（内田 2020）。

（35）a. Well according to me, the editors and publishers have united around the theme of Bush bashing this year.（SPOK）

b. According to me, I should do something functional, something that should bring joy and happiness.（NEWS）

c. According to me, a communist works hard, isn't greedy, tries to help everyone, tries to develop a country, doesn't take bribes, has a strong family.（NEWS）

内田（2020）は、これらの例はいずれも、情報源の提示というより、自らの考えないし意見を表明しているものと解することができ、‘in my view’や‘in my opinion’と同義と判断している。また、‘according to me’が最近のコーパスで見出すことができるのは、「情報源を明示して新しい情報を客観的に提示する according to NP の本来の用法から話し手の意見ないし考えを主観的に述べることへ変容」し、それは「意味論的な意味から語用論的な意味への文法化」とみなすことが可能としている。

今回改めて iWeb で検索してみたところ、文頭、文中、文尾で 1,560 例観察され、そのうち、文頭に生起しているものが 279 例あった [8]。以下がその一部である。

（36）a. I completely agree with your phrase that good customer service makes good business sense. According to me customer is a backbone of any business.（brandwatch.com）

b. According to me, online stores are the best way to earn some good money and get maximum benefits of the internet.（frihost.com）

c. According to me, Brands can have better exposure through the online media, though its（*sic*）only

my personal experience.（moz.com）

これらの例も、内田（2020）で指摘しているように、自分の考えを表明しており、‘in my view’や‘in my opinion’、あるいは‘I think’や‘I believe’とほぼ同じ意味で用いられていると考えられる。このことの証左の一つとして、上の（35b）や以下の（37a）、（37b）のように、should を伴って意見を述べる文脈や、（37c）のように、控えめに suggestion をするような文例が多いことがあげられる。

（37）a. So according to me every school should find each students（*sic*）dreams and aims and teach them according to that so that everyone can get successful.（cision.com）

b. According to me more time should be given to changing the world so that we can get the desired results in time.（marieforleo.com）

c. According to me I would suggest you to have a regular checkups and pap smears near by your gynecologist for the prevention and for the changes.（doctorspring.com）

元来の according to NP というパタンの根幹は第三者からの情報をいわば客観的に伝える言語表現であったが、‘according to me’は話し手の考えを主観的に述べることへ移行したということは、対人的なストラテジーという視点から言えば、according to NP の型を用いることで自ら思うことを前面に出すのを控えて、客観的に提示する表現方法と言ってよいかもしれない。

2. 「NP によると…という（ことだ）」

内田（2020）は英語の according to NP に相当する日本語の文型「NP によると…という（ことだ）」を新聞記事で観察している。その基本的なパタンは次のような例である。

（38）九電によると、発電に使った蒸気を冷やして水に戻す「復水器」に微量の海水が混入したと推定されるが、除去できており、運転継続に支障はないという。放射能漏れはないとしている。（朝日新聞夕刊 2015 年 8 月 21 日大阪本社 3 版）

二つ目の文の「放射能漏れはないとしている」にも「九電によると」がかかっており、「という」「としている」がなければ日本語としては不自然であるが、次の（39）のような基本文型の後半部のない形も存在する（内田 2000）。

（39）捜査関係者によると不審車両は、遺体発見場所の約 100 メートル南の解体工事会社のカメラに映っていた。（朝日新聞朝刊 2015 年 8 月 21 日大阪本社 13 版）

この「…という（ことだ）」の部分のない（39）について、内田（2020）は、不審車両が「遺体発見場所の約 100 メートル南の解体工事会社のカメラに映っていた」ということを、この記事を

書いた記者は実際に見てはいないが、警察発表として信用し、既成事実化して表したものである、と説明している。次例は前半が映像にかかわるものである。

（40）現場近くの防犯カメラ映像を入手したとする地元メディアの配信映像によると、治安部隊は負傷したデモ参加者の応急手当てにあたった救急隊員 3 人を救急車から降ろし、銃床や警棒で打ちのめした。現地報道によると、治安部隊は救急隊員 3 人と救急車の運転手を拘束したほか、別の救護団体の事務所を捜索し、備品を破壊したという。（朝日新聞朝刊 2021 年 3 月 5 日大阪本社 14 版）

（40）では、情報源を現地報道とする後半部には「という」という結びの語句を伴っているが、情報元が地元メディアの配信映像である前半部の文には結びの句がない。これも実際に映像を確認したことからくる「既成事実化」、あるいは確認の現象といえる。後半に「という」が生じているのは、事実確認を映像から判断したわけではないことによる対比の気持ちが関与していると考えることもできよう。

新聞記事におけるこの言語事象を少し詳しくみてみよう。『CD―毎日新聞 2019 データ集　本社版』から 2019 年 1 月 1 日から 1 月 31 日までの朝刊、夕刊にみられる文頭の「によると（、）」を検索したところ次のような結果を得た[9)]。

（41）a.「によると（、）」の出現例は 1,223 例[10)]。
b. 1,223 例のうち、体言止めが 348 例[11)]。
c. 文末表現が現れている場合はすべて「という」で終わっており、その数は 171 例。
d. 文末表現「という」がみられないものは 653 例[12)]。
e. 判断を保留したものや「だろう」「そうだ」などのモダリティ表現で終わっているものが 51 例。

（41b）の「体言止め」の 348 例と（41e）の 51 例を全体の 1,223 例から除くと、824 例となる。つまり、文末が「という」で終わっている例が 171 例（20.7%）、体言止め以外で「という」が省略されたものが 653 例（79.2%）ということになる。「という」が欠落している記事がほぼ 4 倍という結果であるが、これは事実報道と簡潔さという新聞記事の特徴を反映していると思われる[13)]。

「という」が付加されていない具体例を確認してみよう。

（42）a. 竹下通りに面した飲食店の男性店長によると、店の防犯カメラには、幅員約 5 メートルの通りを逆走する車が映っていた。（2019 年 1 月 3 日朝刊）
b. 県警四街道署によると、2 階建て木造住宅が全焼し、焼け跡から子供とみられる 3 人の遺体が見つかった。（2019 年 1 月 1 日朝刊）
c. 日航によると、この便には機長 2 人と副操縦士の計 3 人が乗務予定だった。（2019 年 1 月 10 日朝刊）

（42a）は内田（2020）で説明した、映像から確認できる事実、（42b）と（42c）は情報源からの事実提供の例である。いずれも「という」を付加することは可能であるが[14]、「という」が欠如している場合は、情報源もさることながら、「焼け跡から子供とみられる 3 人の遺体が見つかった」事実、「機長 2 人と副操縦士の計 3 人が乗務予定だった」事実がより重要な情報、優先すべきニュースであることを示唆していると考えることが可能である。他方、「という」が添えられている場合はやはり情報源に立ち位置を置いていると思われる。

「という」を伴わない事例のもうひとつの特徴として、「NP によると」のスコープについて触れておきたい。

（43）a. 関係者によると、大坂はラケットのガット（糸）をよりパワーを出せるはじきのいい種類に変えて今大会に入った。（2019 年 1 月 27 日朝刊）

b. 首相官邸幹部によると、「ウィンドウズ」の更新作業は毎月 1 日に行うことが世界的な標準となっており、4 月 1 日より後の公表となると、反映されるのが 5 月 1 日以降になる。（2019 年 1 月 3 日朝刊）

よくみると、（43a）の「関係者によると」のスコープは文末までかかるのか、「ラケットのガット（糸）をよりパワーを出せるはじきのいい種類に変えて」までなのかはっきりしない。後者の解釈なら「今大会に入った」と判断しているのは書き手ということになる。（43b）は書き手の判断がさらに表面に出ているもので、「首相官邸幹部」からの情報は「世界的な標準となっており」までなら、「4 月 1 日より後の公表となると、反映されるのが 5 月 1 日以降になる」と断定しているのは書き手ということになる。

書き手の判断がこの「NP によると」構文により明瞭に反映されていると考えられるものをみてみよう。

（44）a. 2 人によると、小さい頃に博物館へ行った経験の有無が大人になったときに影響するそうだ。（20019 年 1 月 22 日夕刊）

b. 関係者によると、大会の少し前に風邪で練習を休んだといい、走りに影響したとみられる。（2019 年 1 月 28 日朝刊）

（44a）の「そうだ」は、「らしい」「ちがいない」「ようだ」と同じモダリティ表現で、記事の書き手の判断であることを反映している。「影響するという」が NP を情報源とする客観的な言い方となっているのに対し、書き手の心的態度が前面に出ている。また、（44b）の「（と）みられる」もそう判断したのは、関係者ではなく書き手であるとするのが妥当な解釈であることは、これらの文の末尾に「という」を付加すると不自然になることからも明らかである[15]。次の（45）の記事は、書き手の判断が加わったことを暗示するモダリティ表現や「とみられる」のような文末表現はみられないが、それらに「という」を付け足すことは可能である。

（45）a. ホテルのホームページによると、立食の最大収容人数500人の宴会場で、前夜祭でも使われた。（2019年11月30日朝刊）

b. 工業情報化省によると、中国のワクチン生産能力はすでに年間50億回分に達しており、今後も途上国への支援を強めていく構えだ。（朝日新聞朝刊2021年7月25日大阪本社13版））

これらの記事はそれぞれ文末まで「NPによると」のNPのスコープに含まれるという解釈も考えられるが、もう一方の解釈も可能である。すなわち、（45a）では、宴会場の収容人数が明示されているであろう「ホテルのホームページ」には個別の宴会の情報はおそらく述べられていないと考えられるので、「前夜祭でも使われた」としたのは記者による付加情報であろう。（45b）でも、「ワクチン生産能力はすでに年間50億回分に達して」いるとしているのは「工業情報化省」であり、「今後も途上国への支援を強めていく構えだ」としているのは書き手のコメントであってHP上で述べられているものとは考えにくい。ちなみに、（45）のいずれの例にも「という」を付加することは可能だが、その場合は文全体が情報源のNPから発出されたものという解釈になる。

以上、おもに新聞記事で観察してきた日本語の「NPによると…という（ことだ）」は、NPを情報源として新しい情報を伝達することが意味論的な原則だが、「という（ことだ）」で完結すべき統語的相関関係が崩れ、「結びの語句を省いて新情報の部分を既成事実化、すなわち、情報源から独立した客観的なものであることを示唆すること」（内田2020）へ変容したということができる。換言すれば、第三者の情報をある種の確信をもって内在化して自らの知識として提示する表現手段へと語用論的な変化を遂げたとみなすことが可能である。

VI　結語

本稿は、外部からの情報がどういうプロセスで内在化されるのかということから出発し、日本語独特の言語現象を具現するprivate predicatesと願望表現を取り上げ、当該人物と情報源の関係から証拠性にかかわる語用論的な制約があることを指摘した。すなわち、発話者、願望表現の当事者、それに情報源、の三者の相互関係によって「たい／たがっている」あるいは「さびしい／さびしがっている」の生起が決定されることを例証してきた。

また、情報が外部からのものであることを明示する英語のaccording to NPと日本語の「NPによると…という（ことだ）」を取り上げた。それらが、統語的には認められてこなかった英語のaccording to meの許容と「という」が欠如した「…によると…だ」へ変容した言語事実を提示して、いずれの場合も、意味論的な制約を超えて語用論的な展開がみられることを指摘した。英語では自らの内在情報を表明するという点で、また、日本語では第三者の情報を内在化（知識化）して自らのものとするという点で、この文型の語用論的な「文法化」とみることができることも明らかにした。

参考文献

Aikhenvald, Alexandra Y.（2004）*Evidentiality*. Oxford: Oxford University Press.

Aikhenvald, Alexandra Y.（2018）'Evidentiality: The framework.' In Alexandra Y. Aikhenvald（ed.）, *The Oxford Handbook of Evidentiality*, 1-43. Oxford: Oxford University Press.

Aoki, Haruo.（1986）'Evidentials in Japanese.' In Wallace Chafe and Johanna Nichols（eds.）, *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*, 223-238. Norwood, New Jersey: Ablex Publishing Corporation.

Carston, Robyn. 2002. *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication.* Oxford: Blackwell.（内田聖二・西山佑司・武内道子・山崎英一・松井智子（訳）（2008）『思考と発話－明示的伝達の語用論』東京：研究社）.

DeLancey, Scott.（2001）'The Mirative and Evidentiality.' *Journal of Pragmatics* 33, 369-382.

Grice, Paul. 1989. *Studies in the Way of Words.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press.（清塚邦彦（訳）（1998）『論理と会話』東京：勁草書房）.

de Haan, Ferdinand.（2012）'Evidentiality and Mirativity.' In Robert I. Binnick（ed.）, *The Oxford Handbook of Tense and Aspect*. Oxford: Oxford University Press.

Hill, Nathan.（2012）'"Mirativity" Does not Exist: *ḥdug* in Lhasa "Tibetan" and Other Suspects.' *Linguistic Typology* 16, 389-434.

Lazard, Gilbert.（1999）'Mirativity, Evidentiality, Mediativity, or Other?' *Linguistic Typology* 3, 91-109.

Lazard, Gilbert.（2001）'On the Grammaticalization of Evidentiality.' *Journal of Pragmatics* 33, 359-367.

Narrog, Heiko and Wenjiang Yang.（2018）'Evidentiality in Japanese.' In Alexandra Y. Aikhenvald（ed.）, *Evidentiality,* 709-724. Oxford: Oxford University Press.

Nuyts, Jan.（2017）'Evidentiality Reconsidered.' In Juana Isabel Marín Arrese, Gerda Haßler and Marta Carretero（eds.）, *Evidentiality Revisited*, 57-83. Amsterdam: John Benjamins.

Ross, John Robert.（1970）'On Declarative Sentences.' In Roderick A. Jacobs and Peter S. Rosenbaum（eds）, *Readings in English Transformational Grammar,* 222-272. Tokyo: Kanto Books.

島田雅晴・五十嵐啓太・本田正敏（2016）「日英語を対象にした Mirativity 研究 : 意味論・語用論の観点から」*JELS* 33, 218-219.

Sperber, Dan.（ed.）（2000）*Metarepresentations: A Multidisciplinary Perspective*. Oxford: Oxford University Press.

Sperber, Dan and Deirdre Wilson.（1995）*Relevance: Communication and Cognition*（second edition）. Oxford: Blackwell.（内田聖二・中逵俊明・宋南先・田中圭子（訳）（2000）『関連性理論―伝達と認知』（第 2 版）東京 : 研究社出版）.

内田聖二（2005a）「遂行分析から表意分析へ」*JELS* 22, 221-230.

内田聖二（2005b）「メタ表象と引用」田中実・神崎高明（編）『英語語法研究の新展開』, 149-154, 東京 : 英宝社 .

内田聖二（2011a）「引用とモダリティ―メタ表象の視点から」武内道子・佐藤裕美（編）『発話と文のモダリティ』, 21-42, 東京 : ひつじ書房 .

内田聖二（2011b）『語用論の射程』東京 : 研究社 .

内田聖二（2013）『ことばを読む、心を読む―認知語用論入門』東京 : 開拓社 .

内田聖二（2020）「英語と日本語における証拠性表現の一側面」『奈良英語学談話会論集』奈良英語学談話会 , 31-46.

Uchida, Seiji and Eun-Ju Noh.（2018）'Metarepresentational Phenomena in Japanese and Korean.' *Memoirs of Nara University* 46（Nara University）, 1-23.

Wilson, Deirdre.（2000）'Metarepresentation in Linguistic Communication.' In Dan Sperber（ed.）, *Metarepresentations:*

A Multidisciplinary Perspective, 411-448. Oxford: Oxford University Press.
Wilson, Deirdre and Dan Sperber.（1993）‘Linguistic Form and Relevance.’*Lingua* 93, 1-25.

注

*本稿は日本英文学会第 93 回全国大会（2021 年 5 月 23 日、オンライン開催）において、シンポジウム「認知語用論からみた言語の諸相」の講師として「高次表意からみた証拠性（evidentiality）」のタイトルで発表したものを加筆修正したものである。なお、本研究は JSPS（18K00674）の成果の一部である。

1）（11c）と（11d）の例が示唆しているように、高次表意のなかの命題態度は、しばしば証拠性表現と対応させて取り上げられる意外性（mirativity）の側面として考えることができる。命題態度は、言語記述のなかに一貫性をもって組み込むことが難しいプロソディーからの情報を処理する理論的候補となりうる可能性があるが、詳細は稿を改めなければならない。

2）関連性理論では、新情報と既知情報の相互作用を、「文脈含意（contextual implication）」「既存想定の強化（strengthening existing assumptions）」「矛盾による既存想定の破棄（contradicting and eliminating existing assumptions）」の 3 つに分け、新情報がそのような働きをするとき、その情報は関連性があるとする。

3）一人称が「たがっている」と、三人称が「たい」と、共起するということは、それぞれ一人称が三人称の働きを、三人称が一人称の働きをしていると換言できる。内田（2013：93）は前者の現象を「隠れ三人称」、後者を「隠れ一人称」と呼んでいる。これは統語現象とみられがちな言語現象が語用論的な扱いを受ける可能性を示唆するものである。

4）Uchida and Noh（2018）は韓国語でも同じような制約がみられることを論じている。

5）情報源の特定に関して、内田（2000）は次のような発話の差を指摘している。

（i）太郎、花子と結婚したいって。: 当該人物、情報源ともに「太郎」

（ii）太郎、花子と結婚したがっているって。: 当該人物は「太郎」、情報源は第三者

（i）と（ii）はいずれも花子と結婚する主体は太郎であることを表すが、（i）はその情報を話し手は太郎自身から得たことを含意する。つまり、当該人物、情報源ともに「太郎」である。他方、（ii）では、当該人物は「太郎」であるが、情報源は不詳で第三者から得たものであることが暗示されている。これも情報源を言語表現として何らかの形で具現する証拠性を示唆する現象そのものにほかならない。

6）この（34）では「同一（identical）」とあり、厳密には I=me とはいえない。また、‘any NP’であるので、遂行節の you も含まれうると考えられるが、Ross の議論の流れから「同一」を「同一指示」、‘any NP’を「主語の NP」と解しておく。

7）小学館コーパスネットワークによる BNC Online。

8）2021 年 6 月 23 日現在。

9）以下、新聞名の表記がないものはこの CD から採取した。

10）ちなみに、同義表現、「よれば（、）」の同じ期間における出現例は 24 例であった。

11）「…に増加。」「…を確認。」などの典型的な体言止めをはじめ、「…17% だけ。」、「…450 人に。」などの表現も含む。

12）次のような、文を超えて「という」が付加される例もあるが、このような場合は、「によると」が生起している文を対象とした。

（i）捜査 2 課によると、2 人は共謀し、コロナ禍で収入が減った中小企業のための家賃支援給付金を詐取しようと計画。投資会社の関係者を装って 1 月に専用ウェブサイトで申請し、600 万円を受け取った疑いがある。新井容疑者が手続きし、桜井容疑者がほぼ全額を手にしたという。（朝日新聞朝刊 2021 年 7 月 20 日大阪本社 13 版）

13）ちなみに、新聞という書記媒体に対し、NHK テレビの 7 時のニュース放送を 1 週間（2021 年 8 月 17 日

から 23 日）観察して「NP によりますと…ということです」の出現例をみたところ、コロナ感染症や大雨のニュースが多かったことも影響してか、全体で 13 例しか見当たらなかった。文尾の「ということです」があるものは 10 例（うち、上記注 12 のような形式をとるものが 3 例）、欠如しているものは 3 例であった。新聞記事と比べ、「ということです」付加の割合が多い。以下は付加されていなかったもの。

（i）a. 今日行われた厚生労働省の専門家会合で示された資料によりますと、新規感染者数は昨日までの 1 週間では前の週と比べて全国では 1.31 倍と感染の拡大が続いていて、緊急事態宣言が出されている地域では各地で感染者数の拡大傾向に歯止めがかかっていません。（8 月 18 日）

b. 厚生労働省によりますと、今月 17 日までの 1 週間に全国で感染が確認された人のうち、20 歳未満の数は 22,960 人、およそ 1 か月前と比べて 6 倍あまりにのぼっています。（8 月 20 日）

c. 吉本興業によりますと、今月 17 日骨髄異形成症候群のため大阪府内の自宅で亡くなりました。84 歳でした。（8 月 20 日）

上記（ia）では、「感染の拡大が続いていて」までが資料からの情報で、「各地で感染者数の拡大傾向に歯止めがかかっていません」は NHK の判断という解釈も可能で、（ib）では厚生労働省の「20 歳未満の数は 22,960 人」という情報から「およそ 1 か月前と比べて 6 倍あまりにのぼって」いることを読み解いているととることもできる。つまり、前半部を内在化して結論を導いている例と言ってもよい。（ic）は訃報で、事実を淡々と述べている。

14）違いについては後ほど言及する。

15）「という」とモダリティ表現は共起しない。すなわち、伝聞表現と書き手、話し手の心的表現はどちらかが選択される。たとえば、次の例では「なっているようだ」の代わりに「なっているという」は可能でも「*なっているようだという」とか「*なっているというようだ」は容認できない。

（i）記事によれば、入場時に PCR 検査などの陰性証明提示を求めることや、会場内での食事や飲酒の禁止などが柱となっているようだ。（ヤフーファイナンス前場コメント No.7、2021 年 5 月 31 日 11:30）

なお、（44b）では、前段に「という」の変異形「（休んだ）といい」があるので、文尾に「という」が続くのは不自然だが、「みられるという（ことだ）」という連鎖は可能。もちろん、この場合「みられる」と判断しているのは情報源 NP となる。

Abstract

Evidential phenomena, which have often been discussed in linguistic typology, are to be considered in terms of metarepresentation using web data and newspaper articles from English and Japanese. The original source of information is crucially linked to evidentiality and its linguistic realization varies from language to language. It is widely acknowledged that the two languages have no such morphemes or particles that indicate informational sources. I, however, discuss that private predicates and desiderative expressions in Japanese carry evidential information. I also explain how the uses of ‘according to NP’ in English and the Japanese counterpart, which suggest where the information concerned comes from, are pragmatically changed.

Keywords: evidentiality, higher-level explicature, metarepresentation, internalization, externalization